

# はっきりと発音ができる子

— 構音指導を中心にして —

松本 洋介

## 1. はじめに

ダウン症児は、運動、言語、認知等複数の障害を持ち合わせているものが多い。中でも言語の遅れはダウン症児によく見られるものである。ダウン症児は発語の出現時期が遅れがちである。又発語が可能になってもその発語は不明瞭で、相手とのコミュニケーションに支障をきたすことがよくある。M児もダウン症児であるが、言語、特に発語に関しては著しく遅れており、いくつかの簡単な言葉以外は、コミュニケーションの手段として身振りをを用いることが多い。ダウン症児の発語不明瞭の原因として音節の省略、音節の不規則な誤り、構音の発達の遅れなどが考えられるが、M児の場合もこれらが顕著に見られる。その中でも特に構音の発達の遅れが大きな原因になっていると考えられる。そこで個別学習を中心にしながら構音の発達の遅れを少しずつ改善していくことで、M男が少しでもはっきりと発音ができ、言葉によるコミュニケーションが少しでもできるようになれば、日常生活、更には将来の社会生活がより円滑に送れるようになるのではないかと考え、このテーマと取り組んだ。

## 2. M児の実態

児童名 M・U (男) 昭和51年3月7日生 (小学部5年) ダウン症候群

通園施設に8ヶ月、R幼稚園に10ヶ月通う。

家族の言語使用に関しては特に問題なし。

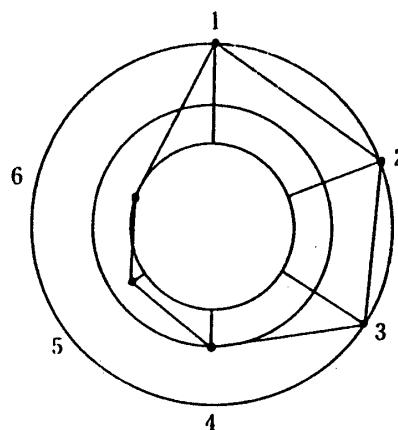
### (1) 一般的特性

一見人なつこそうであるが、新しい環境になじみやすく落ち込みポーズをよく見せる。身辺自立はほぼ確立されているが、言語面で遅れがあり、特に言葉の表現がむずかしく、身振り、手振りで表現しようとする。運動面では特に問題はなく、活発な動きをする。

### (2) 遠城寺式発達検査による実態

右のグラフは遠城寺式発達検査を円形プロフィールで示したものである。このグラフを見てもわかるように、M男は、基本的な生活習慣、手、移動の運動等にくらべ、言語面、特に発語に遅れがあることがわかる。

- ※ 1—移動の運動      2—手の運動  
3—基本的習慣      4—対人関係  
5—言語理解        6—発語



(3) 単音節構音検査による実態

単音節構音検査票にもとづき、検査を行って見た。右の表はその一部を示したものである。その結果、M男の発音で特に問題となる音は、両唇音(パ行)、歯音の摩擦音(サ行)、歯茎音の破裂音(タ行)であることがわかった。

両唇音破裂音	歯音摩擦音	歯茎音破裂音
Pa タ	Sa ラ	Ta ○
Po コ	So コ	To コ
Pe → ○	Se → チュ	Te → チェ
Pu ブ	Su ウ	
Pi ビ		

### 3. 研究の仮説と指導方針

これまでのM男の実態や諸検査などからこの研究を進めていく上で、次のような研究仮説を立てた。  
仮説一 M男の発音における障害は次のような原因によるのではないか。

- (1) あごのかみあわせがうまくいっていないのではないか。
- (2) 摩擦音、破裂音が特に不完全なことから、口腔内呼気の圧力が低いのではないか。
- (3) 口の開け方(口形)がうまくいっていないのではないか。
- (4) 言語理解の遅れ、語い数が少ないのではないか。
- (5) 身体表現力が豊かで身振りである程度意志表示が可能なことから、言葉によって意志伝達をしようという意欲に欠けるのではないか。

以上のような研究仮説にもとづき、次のような指導方針で指導を行っていくことにした。

#### 指導方針

- (1) 発語意欲を高めるために一学習、遊びの中で楽しい会話をする機会を多く持つようにし、話す意欲を高める。
- (2) はっきりした発音ができるようにするために、
  - (a) 個別学習では、口の体操、口形の練習、呼気を強める練習等をする。
  - (b) 学級の学習では、文字指導の時に1語ずつゆっくりと読ませる。
- (3) 話す機会を増やすために、
  - (a) 身振りによる意志表示をした時にはなるべく言葉による意志表示をさせるようにする。
  - (b) 学部や学級の行事の中では司会やあいさつの役をなるべく多く与えるようにする。
  - (c) 毎日きまった言葉を言わせるようにするため、給食の用意ができたなら○○先生に報告させるようにする。

以上のような指導方針を中心にして、M男の発語機能を高めていくことにしたが、その中でも、特に個別学習における構音障害の改善を中心にして進めていくことにした。

### 4 指導実践例の一部

#### (1) 個別学習

小学部では1時間目を個別学習の時間として1週間帯の時間帯でとっている。個別学習では、普段各個人の障害の改善に集中的に取り組むことがむずかしい点をカバーするために1人の子を計画

的に、集中的に指導していくことが必要である。小学部3組でも毎日1時間目を個別の時間とし、1人が週あたり1～2時間指導を受け入れるようにしている。M男も毎週月曜日の1時間目を個別の時間とし指導を行ってきた。主な指導内容は次のようなものである。

- ① 驚きや、喜こびを表現する声は日常でも大きな声で出すことがあるが、50音の単音はほとんど出すことがないので、おちいっきり大きな声であ、い、う…等の単音を出させるようにする。
- ② 口の開閉機能を高めるため口の開け閉めを連続的に行ない、それを数回くり返す。
- ③ 発音時の正しい口形を覚えさせるため、教師の口まねをさせるとともに、鏡にうつった自分の口形を確かめさせる。
- ④ 電話に興味を持っているので、模型の電話を使い、教師と1対1の会話をする。
- ⑤ 呼気の強化をはかるためストローを使い、積み木運びゲームをする。
- ⑥ ドミノ倒しに興味をもっているので、文字積み木を使い、ひとつずつゆっくりと読ませてから並べていかせるようにする。
- ⑦ 「あいうえを」の木を使い、絵の名前をひとつずつゆっくり発音させる。

※ 一単位時間の指導例

時間	指導内容
3分	口の体操
5分	口形の練習
5分	木読み
5分	ストロー吹き
22分	文字積み木を使ったドミノ



文字積み木を読むM男

以上のような方法で個別学習を進めてきたが、1単位時間内にこれらの内容を全てこなすことは無理なので、この中のいくつかを組み合わせで指導していった。ただ①と②については、発音練習の準備練習として毎時間の初めに必ず入れるようにした。M男の口形の特徴として、縦のかみ合わせがうまくいかず、上あごと下あごが左右にずれるということが見られた。4月当初は特にその様子が顕著に見られ、50音の発音をしても口の上下の開閉があまり見られず、上あごと下あごが左右にスライドするといった動きがよく目についたが、口の開閉練習、口形練習により少しずつではあるが、発音時に上下にも口が動くようになってきた。

個別学習の中心としては呼気の強化をはかるストロー吹きと、積み木にかかれた文字をゆっくりと読む練習の2つを大きな2本柱として進めてきた。ストロー吹きは、ストローを用いてテーブルの上の積み木を移動させていくゲームである。ストロー吹きゲームを始めた頃は、ストローからなかなか息が出ず、直接口で積み木を吹いたりすることもあったが、回を重ねるにつれてストローだけでも積み木を移動させることが可能になり、又、本人も興味を持って取り組み2つ、3つと積み木を重ねて動かそうとするようになってきた。

一方、文字積み木をゆっくり読む練習では、早くドミノ倒しがしたいために読み方がいい加減になったり、確実に50音の文字を覚えていないために自信がなく小さな声で言うことが多かった。そこで、まず文字積み木に書いてある文字を確実に覚えること、文字をきちんと読んでからドミノ倒しができることを約束し取り組んだ。50音の文字の習得では、積み木の文字と50音表とを対照させながら覚えさせていくことにした。練習を始めた頃、約3分の2近くはまだあいまいな言葉が多かったが、約半分はほぼ確実に覚えているようである。又、ドミノ倒しがしたいという気持ちが強いことから早く文字を読もうとするが、きちんと読めるまでは何度も言い直させるようにした。その結果、次の表に示すような結果が得られた。

1 学期	2 学期	1 学期	2 学期
ちょう → こう	ちょう → こう	えんとつ → とつ	えんとつ → えーとく
とり → ごり	とり → とる	からす → かし	からす → かるる
うし → ふし	うし → うし	いちご → いっこ	いちご → いっこ
わに → おに	わに → あに	あひる → ある	あひる → あーる
むし → うし	むし → ふし	にわとり → にり	にわとり → にーろり

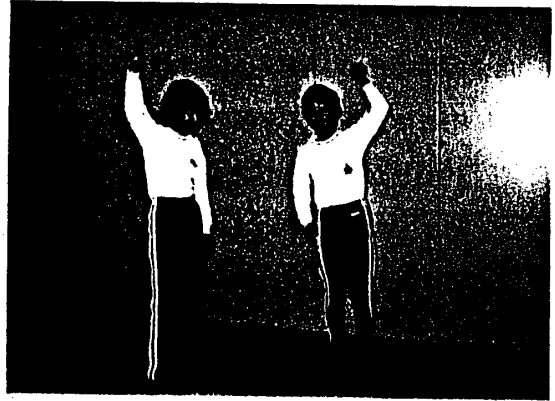
この表は文字積み木に書かれた言葉の一部であるが、完全ではないが、少しずつ正しい発音ができるようになってきた。又、M男の特徴として3音以上の単語は前後、あるいは中間を省略し言うことが多かったが、3音以上の単語も徐々に省略しないで言えるようになってきた。

## (2) 生活単元学習

小学部では月の学習のほとんどを生活単元学習を中心に進めている。生活単元学習の中でも特に言葉を必要とする単元に、学習発表会がある。人前で歌ったりおどったりすることが得意なM男にとって学習発表会は楽しいものであり、又、セリフの練習を通して発音の練習をするのに適した単元である。今年度の学習発表会でもM男は主役の1人となり、いくつかのセリフを言うことになった。練習期間は約3週間であったが、立ちげいこは実質2週間ということであった。劇指導ということで特に次のような点に重点を置いて指導した。

- ① M男がセリフを言う意欲を失わないよう、よくできた時には十分にほめるようにする。
  - ② セリフがいい加減に流れてしまわないようきちんとと言えるまで言い直しをさせる。
  - ③ セリフのイメージがはっきりつかめるよう身振りとセリフを合わせて覚えさせるようにする。
- その結果、短時間であるのとび抜けた変化はなかったが、少しではあるがセリフがはっきりと言えるようになった。M男のセリフの変化は次のようである。

セリフ名	練習前半	練習後半
はれにしよう	はれにひょう	はれにしよう
そうだ	ほうは	そうは
おひさまがいい	ほひはまがいい	ほひさまがいい
いこう	いこう	いこう
なるほど	なるこ	なるほこ



劇練習をするM男

## (2) 日常生活での指導

個別学習、学級での指導の他に学校生活全体を通

じた指導として、普段の会話の中で身振りによる受け答えはなるべくなくすようにし、たとえば言っていることが相手に正確に伝わらなくても言葉で意志伝達をする習慣を養おうと指導してきた。パターン化したものや、あいさつ等は言葉で大體相手に伝わるが、それ以外の時、特に本人がいそいでいるようなときには、ほとんど身振りで意志表示している。

## 5. まとめと考察

4月にM男の受け持ちになってから約半年あまり指導を続けてきた。4月初はまだM男とのレポートがとれず、指導しようとしてもかかれたり、遊びに行ったりすることが多かった。約1ヶ月でレポートもしだいにとれるようになり、個別の学習にも参加するようになってきた。

M男の言語指導を通していくつかの問題点を感じているが、それは主に次の様なものである。

- (1) 口腔内にわずかにある器質的な欠陥をどう補っていくか。
- (2) 個別学習で習得したものが、どのようにしたらより効果的に日常生活の中に生かしていけるか。
- (3) 発語と言語理解とをどのように関連づけて指導していけばよいか。

以上の3つが大きな問題点であるが、更にダウン症児の言語指導はどう進めていけばよいかというのが最も大きな問題点である。

話をするのが不得意なM男に無理に話すことを強制しても話すこと、声を出すこと自体が嫌いになりかねないので、今後も指導を継続していくわけだが、M男の発語意欲をそこなわないように指導していきたいと考える。又、M男は運動能力面では特別な問題はなく、バスケットのシュート、野球、かけっこ等をとっても意欲的にしようとするので、このような遊びの中に言葉かけや言葉と運動をうまく組み合わせ、日常の生活の中で興味のある遊びを通して言葉を指導していくことができれば更に効果があがるのではないかと考える。